

# 輪郭ができること

（描画に学ぶ）

津守 真

幼児は、印象に残った体験や、日頃心に考  
えていることを描画に表現することを、私は  
これまでたびたび述べてきた。そのことを  
またもやはつきりと示してくれたのは、本誌  
の昨年の五月号に記したS子である。三歳の  
S子は、妹の出生のとき、家族と共に二か月  
間私の家にいた。自分の家を離れたこと、未  
知の赤ん坊が生まれることなど、身辺の急激  
な変化の不安定な時期の幼児を、私共もその  
生活に巻きこまれながら精一杯に支えた。二  
か月たつてその子と家族が帰つていった後、  
私共は、その間に子どもが紙片や画用紙にか

いていったものを拾い集めた。そして、それを見てはじめて気付かされたことが幾つもあった。中でも、ここに掲げる描画1を見つけたときには、あの体験が子ども自身にも記憶に残る記念すべきものだったことを知られた。

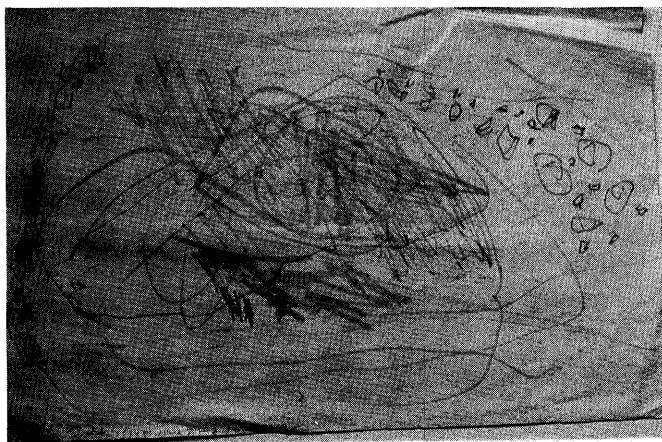
描画1（92・1・22 三歳0か月）をみると、囲みの線の左縁に沿って、十数個の円がかき並べてあり、その上を黄色の螢光マジックで塗ってある。一見して、明らかに、それは前晩に食卓のへりに沿って並べたワイングラスの輝きである。

そのときのこと、91巻5号から引用する。そのころS子は、一寸したことに泣きわめき、大人を困らせていた。

\*

——ある晩、夕食のあと、赤ちゃんの写真

◀ 描画1



のついた「ベビーソープ」の洗剤の箱を見つけたその子は、それを流しに全部あけて泡を作つて遊んだ。ひるま母親のお腹の上にとびおりる遊びをして母親に叱られたとのことで、まだ見たことのない赤ん坊の存在に対する不安が「ベビーソープ」によって呼び起こされたのだろう。長い時間をかけて泡を作るうちに、その子は「かなしいよ」と言つて、えんえん泣いた。

そのうちにふと戸棚の中のワイングラスに目がとまり、次々にそれをテーブルの上に並べた。私の家のワイングラスを九個全部出した。その子は、上等なコーヒーカップを終えると、その子は、青色の丸がいくつも描かれている。観客になつて無言で十個全部出した。食卓のテーブルのへりに沿つて丸く並べたときには、とても綺麗で、本人も私共も思わず見とれた。—— (92・1)

\*

それはかなりの時間をかけた作業で、父親も母親も私共も大人たちがしゅんとして見守る静寂の中で黙々としてなされた。全部終えたとき、S子はほっと一息ついて、「もうねる」と言つて、明るい顔で寝にいった。いつもは、パジャマを着替えるとか着替えないとただただをこねて、床につれてゆくのがひと仕事であるのに。翌朝も、S子は良い機嫌で起きてきた。そして、その日、どこかでこの描画を描いていたのである。

よく見ると、螢光マジックで塗られたワイングラスのほか、紙の右上には、青色の丸がいくつも描かれている。観客になつて無言でその作業を支えていた大人たちである。テーブルの中央には、オレンジとピンクと青と緑の線が動いている。食卓の上に蠟燭を立てて

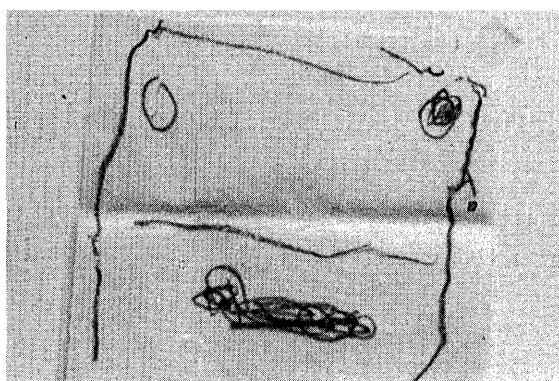
ハッピーバースデーの歌をうたった賑やかな  
明るさである。

私共に忘れがたい記憶を残したこのワイン  
グラスの遊びが、子ども自身によつて描かれ  
たのは、S子にとつても記念すべき成長のス  
テップだったことを示している。

自分の家に帰つた後、S子は私共の家にく  
ることは稀だつたし、私共もその家を訪ねる  
ことは二月に一度くらいであつた。その間に  
S子はときどき描いたものを手紙にして送つ  
てきた。若い母親は、S子に頼まれると、ま  
めに封筒にいれて郵送してくれた。

描画2（92・6・23、三歳五ヶ月）は、そ  
の中の一枚で「くびやつてるじじちゃんのか  
お」である。じじちゃんを描くときには、か  
ならず片目を塗りつぶしたり、セロファンテ

ープを貼りつけたりする。これは、同居して  
いたある日、私が夕方家に帰つてきたとき、  
S子と「ばばちゃん」がテレビの体操をして



▲ 描画2

踊っていて、部屋にとびこんだ私の目に指が入って、私は眼医者にゆき、眼帯をしてもどつて来たのである。そうやって過ごしていだ日々の記憶が、片目の「じじちゃん」に代表されているのであろう。

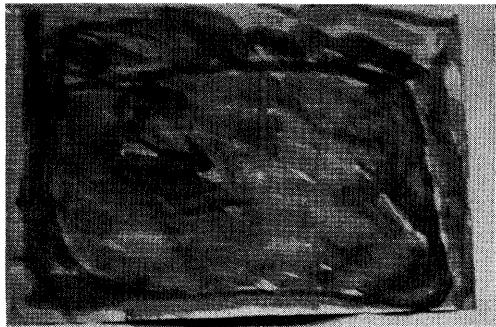
描画3（93・2・11、四歳一か月）は、久し振りに私の家に泊りがけで来て、第一目は一年前の遊びをひと通りやり、第二日目の午前中に描いた連作である。午後には帰ることになっていたので、何か気勢が上がりなかつた。私はいつもと違う材料を出してみようと思ひ、絵の具と筆を出した。S子はすぐに傍に来て、太目の筆に、薄くといた絵の具をたっぷりとふくませて、ボタボタと滴をたらしながら紙に大胆につけた。紙をびしょびしょに濡らしただけのように見えて、私は絵

の具を出すのは早すぎたかと反省した。しかし瞬後に、乾きかけた絵の具は淡い形を残していた。描画3(1)は、うすい輪郭の中を塗

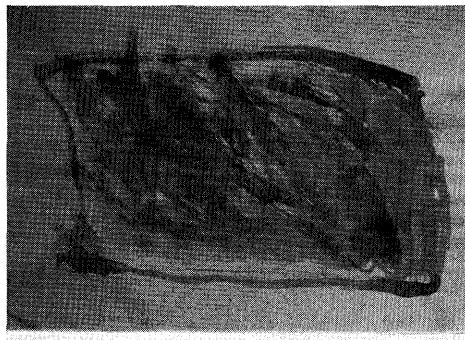
▼ 描画3-(1)



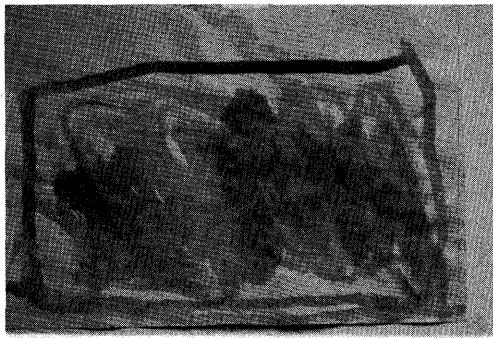
描画  
3—(2)



▶  
描画  
3—(3)



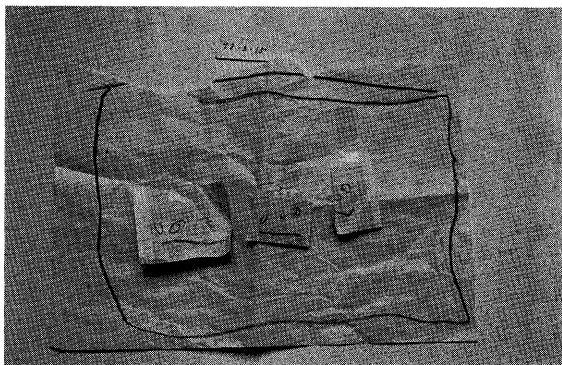
◀  
描画  
3—(4)



りつぶそうとしている。すぐ次に別の紙に描画3(2)を描いた。今度は明瞭な朱色の輪郭の中を朱色で塗り、外を緑と青で塗った。三枚目(描画3(3))は、輪郭の内側を、緑と朱で塗った。四枚目(描画3(4))は、緑色の輪郭の内を、色のまざつた筆で塗り、それで終わった。最初、私は、こんなに枠を作らなくとも、もつと輪郭をはみ出してダイナミックに活動したらしいのに思った。しかし、それから更に数か月を経たいま、こうして自分自身の輪郭や限界を認識してゆくところに、この子の個性の成長があるのだと思う。この日、S子は、間もなく一泊旅行を終えて家に帰ることを承知していた。

描画4(93・3・15、四歳二か月)は、本誌の今年の7月号に記したときごとの数日前

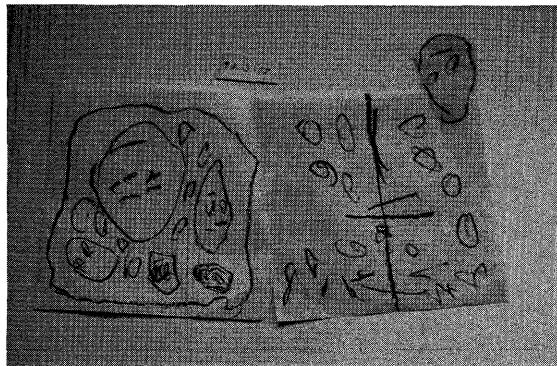
に描かれたもので、私共の家に送られてきた。描画4(1)は、畳みの輪郭の内側に、切り抜かれた人間がセロファンテープで貼ってあ



▲ 描画4-(1)



体が輪郭になつてゐるのだろうか。その右上  
が何人も入つてゐる。右側は四角い折紙の全  
てこないということを母親から電話で聞かさ  
れていた。この描画にはそのことが子ども自  
身によつて語らへてゐるようと思える。S子  
は四月から幼稚園にゆくことになつており、  
それを目前にして、知らない子どもたちや大  
人たちがいる未知の世界に、緊張や不安を感  
じてゐるらしかつた。そして、押入れの中に  
人形を持ちこみ、想像していろいろに動かし  
て、新しく入つてゆく世界に対して自分自身  
の心構えを作つてゐたと言つてもよいのでは  
ないか。セロファンテープで貼つてある切り  
抜いた人物は、S子自身であろう。自分は囲  
みの枠を出たり入つたりできる自由な存在で



▲ 描画 4-(2)

方に、切り抜かれた人物がひとりだけ輪郭を  
はみ出してセロファンテープで貼つてある。  
私共は、S子が何時間も押入れの中に入り、  
ありたけの人形を持ち込んで何かしていて出

てこないということを母親から電話で聞かさ  
れていた。この描画にはそのことが子ども自  
身によつて語らへてゐるようと思える。S子  
は四月から幼稚園にゆくことになつており、  
それを目前にして、知らない子どもたちや大  
人たちがいる未知の世界に、緊張や不安を感  
じてゐるらしかつた。そして、押入れの中に  
人形を持ちこみ、想像していろいろに動かし  
て、新しく入つてゆく世界に対して自分自身  
の心構えを作つてゐたと言つてもよいのでは  
ないか。セロファンテープで貼つてある切り  
抜いた人物は、S子自身であろう。自分は囲  
みの枠を出たり入つたりできる自由な存在で

あるのを見ることがきて嬉しい。

幼稚園に実際に通うようになって、S子は押入れの中の人形遊びを、全くしなくなつた。

ひとりの幼児が一年半の間に描いた描画から、四つの時期をとり上げ、それらがいかに子どもの生活体験と密着しているかを見ることができたと思う。これをもう一度見直すとき、それを通して人間の成長について考えさせられる。

描画1で、子どもは、いまにもこわれそうな自分自身の精神を、落としたら微塵に割れてしまうワイングラスに移し見て、大人たちが見守る支えを感じつつ、無事に並べ終えた。次には子どもはその支えを信じて、つまり、自分の中に自らを支える力を獲得して、次の歩みを進めることができるだろう。人間

は、それぞれの時期に必要とする部分を他人に支えられ、その後は自分で開拓し、成長してゆく。この子どもは、その最初の体験をしたと言つてもよいだろう。

描画2では、子どもは人の顔を描くようになつたのだが、これはただ目、鼻、口を描けるようになつたというだけではない。人の顔を描くようになった子どもは、抽象的な人物を描いているのではなく、特定の人を心に思い浮かべているのであることを、この描画は示している。多くの場合、子どもの描く顔は似たように見えても、ひとつひとつ異なり、それぞれ具体的な人にに対する親しみや感情がこめられていると考えてよい。

描画3では、自分の輪郭と限界を発見し、しかも生命的に活動する人間の姿を思わされる。人には自分の力ではどうにもならない境

遇や運命がある。帰りたくない子どもが自分で決心してそちらに心を向けるとき、子どもは自分で自分の輪郭をつくる作業をしている。程度や種類の違いはあっても、人生の各段階で人は同じような作業をつづける。それは運命に屈従するのではなく、自分で選んで未来をつくる積極的な人間精神である。

描画④は、そのことを更に裏付ける。未だ経験したことのない課題に遭遇して、人は内面に沈潜し、迷い、予めためしなどしつつ、そのことに当面し、それを越えてゆく。それ

をするのは本質的に自由である自分自身である。考えすぎと言われるかもしれないが、描画④の右上の、切り抜いて貼った人物は、子ども自身のそのような自己意識であろう。

子どもは子どもの水準で、大人は大人の水準で、本質的に共通な人生の探究をしている。子どもが描き、大人がそれを受けとり、人生の求道者としての共通の精神のはたらきをそこに読みとっても、子どもはそれをゆるしてくれるだろう。

(愛育養護学校)

